

非正規滞在者への支援における「ゆらぎ」：役割とその葛藤についての一考察
'Yuragi' in Supporting Irregular Migrants: A Consideration of Roles and Their Conflicts

中村 翔（慶應義塾大学大学院社会学研究科）
NAKAMURA Sho (Graduate School of Human Relations, Keio University)

キーワード：非正規滞在，支援者，役割

1. 研究の背景と目的

2024年6月に施行された改正入管法は、日本の出入国管理体制における大きな転換点となった。とりわけ、新たに導入された送還停止効の例外規定および監理措置制度は、日本での滞在を望む非正規滞在者にとって深刻な懸念を残すものとなった。加えて、この改正法は支援者——ここでは、入管収容所での面会活動や非正規滞在者への生活支援等をおこなう有志の人びとを指す——に対しても少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる。たとえば仮放免に比べて厳格な制度設計となっている監理措置制度の新設に対し、なんみんフォーラム〈FRJ〉が実施したアンケート調査によれば、回答した支援者の90%が「監理人になれない・なりたくない」と回答している（特定非営利活動法人なんみんフォーラム，2023）。このように非正規滞在者への支援活動もまた、入管法の改正によって一層困難になっている可能性がある。

出入国管理体制とその変化は、非正規滞在者だけでなく、かれらを支える支援者とその支援活動にも影響を与える。支援者は、非正規滞在者と国家あるいは法制度のあいだに立ち、その狭間で多様な要求にさらされる。非正規滞在者からは、入管収容所からの解放、滞在中の生活支援、在留資格の取得に向けたサポートなどが求められ、支援者はそれに応えようと努める。他方で国家や法制度は支援者に対し、日本の出入国管理体制を円滑に機能させるための補助的役割を果たすことを要請する。このことは、国会議員や入管庁長官の発言を読み解くと明らかになる。したがって支援者は、両者の狭間において期待や挫折、葛藤といった「ゆらぎ」と呼びうる現象——それは支援者みずからの役割意識に対する戸惑いとも言える——を経験する。

本報告は、非正規滞在者への支援に携わる人びとが経験する「ゆらぎ」について明らかにすることを目的とする。具体的には第一に、国会での議論や入管関係者のインタビュー記録を参照に国家や法制度が支援者に対して要求する役割を整理し、支援者が位置付けられている狭間について明らかにする。第二に、支援者への聞き取り調査の結果をもとに、支援の現場で経験される役割の「ゆらぎ」の諸相について考察する。最後に、このような「ゆらぎ」を明らかにすることの学術的および政策的意義について検討を加える。

2. 分析の視座と方法

支援者が経験しうる「ゆらぎ」は、非正規滞在や入管収容問題だけでなく、介護、自立支援、災害ボランティアなど、ケアにかかわるさまざまなフィールドにおいて確認されている。今日の社会学において役割〈role〉は、ミード〈George H. Mead〉の社会的自我論を継承したブルーマー〈Herbert Blumer〉をはじめとする議論によって、日常的な他者との相互行為を通じて意味づけられ、修正されるものとして理解される（Blumer, 1961=1991）。この意味において、支援者の役割は固定的ではなく動的なものとして理解できる。支援者はそれゆえに「ゆらぐ」のであり、組織心理学などの分野では、このような役割の不安定さは役割葛藤〈role conflict〉や役割矛盾〈role ambiguity〉といった概念で説明される（たとえば Yoshie et al., 2008）。これらの議論を踏まえて、本報告では

支援者の「ゆらぎ」を「非正規滞在者からの要望と国家や法制度からの要求とのあいだで経験される、みずからの役割意識に対する葛藤や矛盾」と措定して分析する。

分析では、2025年7月から9月にかけて実施された4人の支援経験者への聞き取り調査結果を用いる。調査では半構造化インタビューを採用し、「支援のきっかけ」、「支援を通じた心理的な変化」、「支援において嬉しかったことやつらかったこと」等を中心に聞き取りをおこなった。なお、本報告で参照する調査は、慶應義塾大学文学部・文学研究科・社会学研究科倫理委員会の審査および承認を得たものである。

3. 調査結果

調査対象者の4人はそれぞれが、いくつかの異なる場面において役割に対する「ゆらぎ」を経験していた。それらの場面は①非正規滞在者からの要望に応えることが難しいとき、②支援活動が法制度によって規制されるとき、そして③支援者としてのアイデンティティに疑念が生じたときに整理することができる。

①について、ある支援者は、支援には共感だけではなく理性が求められると学んだことがあった。それまでこの支援者は共感に突き動かされて支援をおこなっていたが、「私たちに何ができるのか」と自問するなかで、支援の実現性のためにはある程度相手のニーズを選択しなければならないことに気づくようになる。この支援者は、相手の要望に応えたいという気持ちと支援活動とのあいだで、みずからの役割に対する葛藤を語っていた。また、②については、とりわけ仮放免や監理措置といった制度が支援活動に制約をもたらす場面において、役割の「ゆらぎ」を表出させていた。支援者は、再収容を防ぐために、仮放免者に対して「(仕事は)ダメですよ」と言わなければならない。しかし、収容を回避するための説得は、仮放免者にとっては自由や尊厳が奪われ続けることへの忍耐を要求するものでもある。ある支援者は、支援で求められる役割と他者の置かれた状況とのあいだで、みずからの意思や目的と実践が矛盾する経験を語っていた。そして③の「ゆらぎ」は、支援者が他の支援者とのかわりや、「支援者」、「友人」、「調査者」としての立場を往還しながら活動するなかで、支援を行うこと、あるいは支援者として問題に関与することの意味を自問する語りのなかにあらわれていた。

支援者は、非正規滞在者のニーズと国家や法制度の要求とのあいだで「ゆらぎ」を経験し、それは時として支援者自身に心身の負担を強いることになる。しかし、支援者の語りには同時に、葛藤や矛盾を引き受けることでみずからの立場を再び意味づけようとする試みもあった。「ゆらぎ」への注目には、支援者が問題領域の「当事者になる」様相を理解する手がかりにもなる。

付記

本調査は JST 博士後期課程学生支援プロジェクト (JPMJSP2123) の助成を受けたものである。

参考文献

- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, New Jersey: Prentice Hall (1991, 後藤将之訳、『シンボリック相互作用論——パースペクティブと方法』勁草書房)。
- 特定非営利活動法人なんみんフォーラム, 2023, 「監理措置制度に関する意見聴取 (2023 年版) 概要」(2025 年 9 月 11 日取得, <http://frj.or.jp/news/wp-content/uploads/sites/2/2023/04/a7a6ae4ded9a21848d6fdc26e25f6d18.pdf>)
- Yoshie, Satoru, Tami, Saito, Miyako, Takahashi and Ichiro, Kai, 2008, “Effect of Work Environment on Care Managers’ Role Ambiguity: An Exploratory Study in Japan,” *Care Management Journals*, 9(3): 113-121.